

## 審査の結果の要旨

氏名 志村広子

健康に対する身体活動の効果は広く認識されているにもかかわらず、先進国における成人の身体活動レベルは未だに低い。効果的な介入を行うためには、身体活動と関連のある要因を明らかにすることが重要であるが、1990年代中ごろまで、環境的要因との関連についてはほとんど調べられてこなかった。本論文は、身体活動のうち中高齢者における歩行行動に注目し、環境の中でも特に人間が作り出した環境（built environment）との関連について、理解を一步進めることを試みたものである。

本論文は、全6章から構成されている。第1章では、身体活動の現状や関連要因についての研究の進展状況、中高齢者における歩行行動の重要性などについて言及している。そして、先行研究では環境的要因と歩行行動との関連について、時系列的な変化に関する分析や、人口統計的要因・心理社会的要因などを同時に含めた分析がほとんど行われてこなかったことを指摘し、これらを考慮した上で、歩行の目的別に検討を行うことを本論文（研究1および研究2）の目的として挙げている。

研究は、歩行行動に関連する地理情報が整備されたオーストラリアのアデレード在住の成人を対象として行われた。第2章では、両研究に共通する研究のデザイン、サンプリングの方法、使われた指標の詳細について説明している。また、第3章では、分析に用いた各変数の記述統計、および統計モデルに組み込んだ変数の選択方法について述べている。

第4章では、環境的要因の指標の一つであり、道路の接続性や土地利用の多様性などの観点から、歩くことをどれだけ促すような環境であるかを総合的に評価したウォーカビリティ（walkability）と呼ばれる指標に注目し、ある場所から別の場所への移動のための歩行、およびレクリエーションとしての歩行それぞれの長期的変化との関連を調べ、ウォーカビリティが高いほど移動のための歩行が長期的に維持されることを示した（研究1）。

第5章では、環境的要因以外に、よく知られている人口統計的要因や心理社会的要因なども含めた上で、各要因と、それぞれの歩行の長期的変化との関連を調べている。それぞれの歩行の長期的変化について、異なる心理社会的要因および環境的要因が関連していたことに加え、研究1と同様、ウォーカビリティについては移動のための歩行の長期的変化との間に有意な正の関係がみられたことを明らかにしている（研究2）。

第6章では、統計モデルに組み込む変数選択の基準を変えるなど、分析方法を変えた場合の結果についても考察し、ウォーカビリティと移動のための歩行の長期的変化との関係は比較的安定したものであると主張している。

本論文は、縦断的な分析をもとに移動のための歩行と環境的要因との関連を示した点、人口統計的要因や心理社会的要因なども含めて検討した場合でも両者の関係がみられることを示した点、そして、歩行行動の関連要因は歩行の目的別に区別して分析する必要があることを示した点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。